Rikkyo Psychological Research
1999, Vol. 42, 31-38

原　著

社会的スキルとしての笑い[1]

立教大学　押見輝男

Laughter as a social skill

Teruo OSHIMI (Rikkyo University)

The current research investigated a classification of forced laughter and its relationship to self-consciousness. Participants (n=143) completed the forced laughter scale and the Fenigstein, Scheier, & Buss (1975) self-consciousness scale. Factor analysis of the forced laughter scale revealed that forced laughter consists of three functional types: affect control, atmosphere control, and action control. Public self-consciousness correlated positively with both the affect and action control functions of forced laughter. Private self-consciousness did not correlate with any functions of forced laughter. The relationships between public self-consciousness and the atmosphere control function of forced laughter are discussed.

Key words: forced laughter, public self-consciousness, private self-consciousness, social skill.

笑い(laughter)はヒトのみに認められる反応であるとの意見には反論がおきても，笑いが人間行動を特徴づける反応であるとの意見には異論は生じないであろう．人間の笑いは豊かで複雑である．Giles & Oxford(1970)は笑いが生起する状況の考察から，笑いを次の7種類に分類している．1)滑稽笑い(humorous laughter)：面白いことが見聞されたときに，ユーモアに対する行動的反応として生起する笑い．2)社会的笑い(social laughter)：笑う人を特定の社会集団に統合させるのに役立つ行動的反応として生起する笑い．面白おかしく感じてはいないが，集団の他の成員が笑っているからという理由で，あるいは，自分が笑うことを集団の他の成員から期待されているために，笑うような場合である．3)無知の笑い(ignorance laughter)：自分の無知を隠蔽するための行動的反応として生起する笑い．4)不安笑い(anxiety laughter)：特定の不安喚起状況における緊張解消の行動的反応として生ずる笑い．極度のストレス状態から解放されたときに生起するような笑い．5)嘲笑(derision laughter)：一般的に是認されていない行為をした人や異常な身体的行動的属性をもつ人に対する，直接的損傷としての，また，それとなくあてこすりを言った後の防衛的意味からの，行動的反応として生起する笑い．6)弁解笑い(apologetic laughter)：防衛的な意味から，特定の行動の力を弱めるための笑い．7)くすぐり笑い(tickling)：くすぐられるときに生ずる笑い．

愉快笑いと作り笑い

このGilesらの笑いの分類は，笑う人の内部の感情状態に着目すると，さらに2種類に大別できる．面白おかしい，愉快で楽しい，うれしいといったポジティブな感情が起爆剤となって起こる“愉快笑い(pleasure laughter)”と，そのような感情がないか極めて弱い笑いである“作り笑い(forced laughter)”ないし“空笑い(feigned laughter)”で

[1] 本研究は，立教大学文学部1998年度集中合同講義2「文化装置としての笑い」に筆者が講師の一人として参加したことが契機となった．集中合同講義のディレクターを務められた小島康男ドイツ文学科教授に謝意を表します．

ある．Gilesらの挙げている笑いは滑稽笑い，不安笑い，くすぐり笑いは“愉快笑い”に属し，社会的笑い，無知の笑い，嘲笑，弁解笑いは“作り笑い”のカテゴリに入るといえる．俗に言う，接客業従事者が示す“営業笑い”は，作り笑いの典型例である．

人はなぜ面白おかしいと感じて笑うのか，つまり愉快笑いの発生機制についての研究は，ユーモアの心理学的研究としてかなり進展している(McGhee & Goldstein, 1983；押見，1973；上野，1992)．これに対して作り笑いの研究は，自然な笑い（スマイル）と作り笑いとでは表情の特徴において，また，笑いの持続時間などの面でどのような違いがあるかの研究が行われている程度である(e.g., Ekman & Friesen, 1982)．人はなぜ面白おかしく感じていないのに笑うのかについての実証的研究は管見に入らない．

作り笑いはすぐれて社会心理学的な現象である．人は他者との相互作用において何らかの目的を達成するために作り笑いを示している．相互作用の目的を実現する上で効果的に行動することを社会的スキル(social skill)というが(Argyle, 1981)，人はまさに社会的スキルの一つとして作り笑いを表出しているのである．社会的スキルとしての作り笑いの有効性は，Ekman & Friesen(1975)の表情コントロールの技法の考察からも充分に窺える．Ekmanらは，人は自分の感情を表出する表情をコントロールすることで他者に影響を及ぼそうとするが，コントロールする表情の中でも笑い，とくにスマイルが重要な役割を果たしていると指摘している．例えば，自分の感情表出の注釈として人はよく笑いを見せる．怒った表情をした後に故意に微笑むことがあるのは，自分の怒りがそれほど強くはないことを補足的に伝えようとしているのであり，恐怖や悲しみの表情を示した後で故意に笑顔を見せるのは，自分が恐怖や悲しみに耐えられることを他人に知らせる注釈行為といえる．また注釈とは別に，真の感情を隠蔽，擬装するためにも笑いは使われる．面白く感じていないが空笑いする(擬態)，悲しみや恐怖の感情を他人に悟られないようにするため笑顔を見せる（隠蔽）などである．

作り笑いのタイプとその規定因

Ekmanらの指摘する作り笑いの意図，目的は自分の感情をコントロールして表出することであるが，作り笑いの意図，目的は他にも考えられる．Gilesらの挙げる笑いの種類からいえば，集団内で同調し成員としての地位を確保しようとする意図(社会的笑い)や，自己評価の低下を防衛しようとする意図（無知の笑い，弁解笑い）などもある．このように作り笑いの意図，目的を考えると作り笑いのタイプは複数あると予想できることになる．従って，社会的スキルとしての作り笑いを考察する実証的研究としては，まず第一に，作り笑いの分類，タイプの同定の問題に取り組むことが望ましいといえる．作り笑い現象の複雑さを考慮すると，作り笑いの考察は笑いのタイプ別に分析することが有益と思われるからである．そこで，本研究では，日常社会生活において見られる作り笑いの行動項目を収集し，その作り笑い反応間の関連性の分析から，作り笑いのタイプを同定してみたい．

また本研究では，作り笑い反応を規定する要因としてパーソナリティ要因の影響も検討する．作り笑いを表出しやすい傾向には日常観察からも窺えるように個人差が予想される．この個人差と関わるパーソナリティ変数は，行動の自己調整(self-regulation)を本質的特徴とする性格特性であろう．作り笑いを表出するには，自分の行動を自己モニターし心的エネルギーを投入して自分の行動を変えて行くことが必要となるからである．行動の自己調整と関連するパーソナリティ特性の一つは，Fenigstein, Scheier, & Buss(1975)の自己意識特性である．

自己意識特性

自己意識特性(self-consciousness)は，注意が自分の方に強く向くと行動の自己調整が働き始めると仮定する自己フォーカス理論(Carver & Scheier,

1981; Duval & Wicklund, 1972)の文脈の中で，注意を自分自身に向けやすい性質を示す性格特性概念として唱えられたものである．Fenigsteinらの分析からは，自己意識特性には2つの下位タイプのあることが明らかにされている．その一つの“私的自己意識 (private self-consciousness)”は，私的で内面的な自己側面—感情，態度，動機，身体状態—に注意を向けやすい性質である．いま一つの“公的自己意識 (public self-consciousness)”は他人から見られている自己側面—容姿，しぐさ，行動様式—に注意を向けやすい性質である．

自己への注意がひき起こす行動的効果について，状況要因を操作して調べた研究結果と自己意識特性を用いて調べた研究結果には対応関係が認められているので，自己意識特性の効果の生起機制も行動の自己調整の観点から考えることができる(押見，1990，1992)．私的自己意識と公的自己意識は，行動の自己調整に従事しやすいという面では同じであるが，自分の行動が自己モニターされ評価される際に重視される規準(standard)が異なる．私的自己意識では，自分の感情，態度に忠実であれとする規準が重視され，公的自己意識では，社会的受容を尊重する規準が重視され顕在化しやすいのである (Cheek & Briggs, 1982)．

作り笑いの主要な動機は自己呈示 (self-presentation)であり，作り笑いが表出される状況の行動の自己調整では社会的受容規準が顕現しやすいことを考えると，作り笑いの反応傾向の強さは公的自己意識と正の関係があり，私的自己意識とは関連がないと予想できる．しかし，作り笑いの中には自己呈示動機の影響の弱いものもあるとなると，作り笑い反応と公的自己意識の正の関係は必ずしも常に認められるわけではないということになる．この探索的な検討課題の解答も本研究で明らかにされよう．

方　法

調査対象と手続

調査では立教大学で文学部専門科目(2科目)を受講中の男女大学生，143名の協力を得た．講義時間の一部を使い，受講生に作り笑い尺度と自己意識尺度からなる質問紙を配付し，その場で匿名形式で回答を求めた．本研究の趣旨説明はデータ分析後に，得られた結果の説明と共に講義時間内に集団で行った．

回答の欠損が作り笑い尺度項目に2名，私的自己意識尺度項目に1名，公的自己意識尺度項目に2名みられ，それぞれ関連するデータ分析の際に削除した．

作り笑い尺度の作成

日常社会生活における作り笑いの行動項目例を収集し，20項目にまとめた(項目内容は，表1を参照のこと)．項目例の収集に際しては，小人数の大学院生を対象にして行った聞き取り調査と，上野(1993)，宮戸・上野(1996)を参考にした．尺度の回答形式は“5：よくあてはまる”から“1：まったくあてはまらない”の5段階評定とした．

自己意識尺度

Fenigstein, Scheier, & Buss(1975)の尺度を翻案した押見・渡辺・石川(1986)の日本語版を用いた．私的自己意識尺度9項目，公的自己意識尺度9項目，対人不安尺度7項目，filler項目5項目からなる，リカートタイプの5段階尺度である．本研究では私的および公的自己意識尺度の計18項目のみを用いた．

結　果

作り笑い尺度の因子分析

作り笑い尺度20項目の評定値をもとに主成分分析による因子分析を行った．固有値1.0以上の因子は6因子抽出されたが，スクリー・プロットの検討に基づき3因子解を適当と判断した．この3因子の固有値は第Ⅰ因子4.066，第Ⅱ因子2.876，第Ⅲ因子1.779であり，3因子の累積寄与率は43.607%であった．バリマックス回転により各因子の解釈を行ったが，回転後の負荷量の一覧が

表1　作り笑い尺度の回転後の因子パターン

項目番号・項目内容	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ
8．自分の内心の不愉快さを知られないように，作り笑いをすることがある	.726	-.109	-.077
16．相手が不愉快そうなとき，わざと笑顔で接するようにする	.707	.049	.135
6．仲間が笑っているときは，おもしろくなくても笑うふりをする	.619	.049	.000
1．悲しい気持ちのときに人と会う際は，とくに笑顔を示そうと心がける	.609	.090	-.018
3．初対面の人と会うときは，笑顔を絶やさないようにする	.534	.432	-.319
5．相手の話が理解できないようなとき，笑ってごまかすことがある	.529	-.032	.116
18．失敗の落ち度が相手にあるとき，笑顔で接するようにする	.469	.174	-.048
7．目上の人に会うときは，笑顔で接するようにする	.467	.454	-.224
14．顔で笑って心で泣いたようなことがある	.461	-.290	.307
4．人前でなにかへまをしたようなときは，てれ笑いすることがある	.399	.073	.105
2．内心嫌っている人でも，笑顔で挨拶する	.369	.107	-.365
9．仲間同士で過ごすときは，人を笑わせる行為を進んでする	.044	.842	.134
17．その場の雰囲気を和らげるために，人を笑わせようとすることがある	.174	.730	.201
10．自分の失敗を笑い話のネタとする	.059	.722	.126
19．深刻な身の上話を笑顔をまじえて話すことがある	.009	.476	.039
15．グループの和を壊すような行為をした仲間をからかって笑い者にすることがある	.073	.039	.779
12．友人を皮肉って，皆の笑いを誘うことがある	-.322	.464	.537
11．他の人と一緒になにか怖い目に遭った後は笑い顔をみせようと努めることがある	.285	.310	.529
13．怒った直後に，笑顔を見せて相手を許すことがある	.332	.041	.501
20．自分が所属しないグループのことをからかって仲間同士で笑い合うことがある	-.104	.282	.467
固有値	4.066	2.876	1.779
寄与率%	20.332	14.380	8.895

表1である．

第Ⅰ因子に対して高い負荷を示した項目は，“8．自分の内心の不愉快さを知られないように，作り笑いをすることがある”，“16．相手が不愉快そうなとき，わざと笑顔で接するようにする”，“6．仲間が笑っているときは，おもしろくなくても笑うふりをする”，“1．悲しい気持ちのときに人と会う際は，とくに笑顔を示そうと心がける”，“3．初対面の人と会うときは，笑顔を絶やさないようにする”，“5．相手の話が理解できないようなとき，笑ってごまかすことがある”などであった．これらは不愉快さや悲しい気持ち，ばつの悪さなどのネガティブな感情を解消ないし隠蔽することを意図した作り笑いであり，“感情制御（affect control）”の作り笑いといえる．

第Ⅱ因子に負荷量の高い項目は“9．仲間同士で過ごすときは，人を笑わせる行為を進んでする”，“17．その場の雰囲気を和らげるために，人を笑わせようとすることがある”，“10．自分の失敗を笑い話のネタとする”，“19．深刻な身の上話を笑顔をまじえて話すことがある”，“7．目上の人に会うときは，笑顔で接するようにする”であった．これらは他者を笑わせ和ませる行為に随伴する作り笑いであり，場の緊張的雰囲気を解消したり，場を盛り上げたりする意図が共通して窺えるので，“雰囲気操作（atmosphere control）”の作り笑いと命名できる．

第Ⅲ因子に対して高い負荷量を示した項目は，“15．グループの和を壊すような行為をした仲間をからかって笑い者にすることがある”，“12．友人を皮肉って，皆の笑いを誘うことがある”，“11．他の人と一緒になにか怖い目に遭った後は笑い顔をみ

せようと努めることがある”，“13.怒った直後に，笑顔を見せて相手を許すことがある”，“20.自分が所属しないグループのことをからかって仲間同士で笑い合うことがある”，“2.内心嫌っている人でも，笑顔で挨拶する”であった．これらは他者の行為を矯正したりコントロールしようとして表出される作り笑いであるので，“行為統制(action control)”の作り笑いと命名した．

各タイプの作り笑いの反応傾向の個人差指標は，それぞれの因子に負荷の高い項目の評定値を加算して算出したが，項目7は第Ⅰ因子と第Ⅱ因子，項目2は第Ⅰ因子と第Ⅲ因子の負荷量が近似していたので得点化からは除いた．従って，第Ⅰ因子の感情制御は9項目，第Ⅱ因子の雰囲気操作は4項目，第Ⅲ因子の行為統制は5項目の合計得点となる．作り笑いのタイプ間の相関は，感情制御—雰囲気操作が$r=.169$ ($p<.05$)，感情制御—行為統制が$r=.111$(ns)，雰囲気操作—行為統制が$r=.389$ ($p<.01$)であった．

相関分析

相関分析で用いる各変数の平均と標準偏差が**表2**である．また，本研究でのデータに基づく自己意識尺度の信頼性係数は，私的自己意識$\alpha=.768$，公的自己意識$\alpha=.758$であり，共に十分な高さの信頼性が認められた．

表2　各変数の平均と標準偏差

変数	n	M	SD
私的自己意識	142	35.190	5.588
公的自己意識	141	34.368	5.619
第Ⅰ因子：感情制御	143	30.349	6.129
第Ⅱ因子：雰囲気操作	141	14.297	3.354
第Ⅲ因子：行為統制	143	14.181	3.903

2タイプの自己意識特性と3タイプの作り笑い反応との間でピアソンの相関係数を調べた．また，私的自己意識と公的自己意識の間には有意な正の相関($r=.245$, $p<.01$)が認められたので，他方の自己意識特性を統制した偏相関係数も算出した．この相関分析の結果をまとめたものが**表3**である．私的自己意識はいずれのタイプの作り笑い反応とも無相関であり，公的自己意識を統制した偏相関の結果でも変りはなかった．公的自己意識は感情制御と行為統制の作り笑い反応と正の相関があったが，雰囲気操作の作り笑い反応とは無相関であった．この関係は私的自己意識を統制した偏相関でも同一であった．

表3　作り笑いのタイプと自己意識特性の相関関係

作り笑いのタイプ	私的自己意識[a]	公的自己意識[b]
感情制御	-.034 (-.132)	.351**(.370**)
雰囲気操作	.062 (.039)	.096(.084)
行為統制	.042 (-.011)	.213*(.209*)

*$p<.05$, **$p<.01$
a ( )内は公的自己意識を統制した偏相関係数
b ( )内は私的自己意識を統制した偏相関係数

考　察

作り笑いのタイプ

本研究では3つのタイプの作り笑いが同定された．感情制御，雰囲気操作，行為統制のための作り笑いである．この作り笑いの多様さは，社会的スキルとして人がいかに豊かに巧妙に作り笑いを行使しているかの証左であろう．かつてラフカディオ・ハーンは『日本人の微笑』(講談社学術文庫・新潮文庫)の中で，明治時代の日本で生活した外国人が不可解だと嘆じた日本人の笑いの例を挙げている．中でも喧伝されているものは，夫を亡くした日本人の家政婦が主人の外国人女性に夫の遺骨の入った壺を見せながら笑ったという逸話である．このいわゆる‘ジャパニーズ・スマイル’は，本研究結果から解釈すれば，自然な笑い，愉快笑いではなく，作り笑い，それも感情制御および雰囲気操作の作り笑いであったといえよう．

感情制御の作り笑いは自分の感情を隠蔽したり，ばつの悪さを解消しようとする意図を含むもので，主にこれはEkmanらが表情コントロールの技法として考察した笑いにあたるものであった．雰囲気操作の作り笑いは，場の雰囲気の調整とは見方を変えれば関係の親密さの程度の維持・調整ともいえるので，Argyle & Dean(1965)の親密性平衡

モデルの中で言及されている笑いに該当するといえよう．行為統制の作り笑いは，日常表現として冷笑，嘲笑という言葉が使われるケースの多くに見られる笑いのタイプである．

作り笑いのタイプ間の関係については，感情制御が他とは独立性が強く，雰囲気操作と行為統制はやや強い正の相関が認められた．このことは作り笑いの意図，目的の達成に関与する要因の類似性によると考えられる．感情制御の作り笑いの目的達成は，専ら行為者の作り笑いの演技性のみに規定されている．これに対して，雰囲気操作と行為統制の目的の達成はともに行為者の演技性だけではなく，作り笑いが随伴する対人行動の有効性や作り笑いの表出対象である他者の反応性が強く関与しているという共通性がある．

作り笑いと自己意識特性の関係

本研究のいま一つの目的は、作り笑い反応を規定するパーソナリティ要因として，自己意識特性の影響を調べることであった．本研究の結果では，予想した通り，公的自己意識は3タイプ中2タイプの作り笑い反応と正の関係が見られ，私的自己意識の方はいずれの作り笑い反応とも関連が見られなかった．作り笑いの主要な動機が自己呈示であり，作り笑いが対人相互作用状況における行動の自己調整の現れであると考えると，また，公的自己意識は社会的受容規準に基づいて行動の自己調整を行う傾性であるので，本研究で認められた関係性は納得の得やすいものといえよう．問題は，なぜ公的自己意識が雰囲気操作の作り笑い反応と関連がないのかである．

この理由は4つ考えられる．第一は，作り笑いの主要な動機である自己呈示の影響が，雰囲気操作の作り笑いの場合は他に比べて弱いということである．このことが正しければ，公的自己意識の高い者が作り笑いを試みようとする傾向は曖昧となる．第二は，自己呈示ともやや関係するが，雰囲気操作の作り笑いが自己本位性や私利という特徴が相対的に弱く，反対に，パートナーを思いやる，愛他的で他者中心的な行為という性質が強いことである．雰囲気操作の作り笑いには，他者や集団全体の心理状態の改善という要素が含まれている．Davis(1983)，中江ら(1999)は，公的自己意識が他者の視点に立って他者の認識状態を理解しようとするパースペクティブ・テイキング傾向と関連がないことを見出している．つまり，公的自己意識の高い者の関心は，他者そのものにあるのではなく，あくまで自分の方にあり，従って自己評価にとって強い意味を持つ状況以外では，公的自己意識の効果は弱まるということになる．いずれにせよ，雰囲気操作の作り笑いが自己呈示や愛他的傾向とどのような関係にあるか，今後詳しく検討されなければならない．

第三に考えられる理由は，そもそも主に雰囲気操作の作り笑いはパートナーを笑わせ和ませるためのユーモア行為に随伴するものであるが，公的自己意識はこのユーモア行為のスキルと関連がないことの影響かもしれないということである．私的自己意識はユーモア感知と関連があり(押見，1980)，自分を元気づけるような支援的ユーモア志向が強い(宮戸・上野，1996)ことは明らかにされているが，公的自己意識がユーモア行為と関連が見られたとする研究は報告されていない．公的自己意識はユーモア行為と関連がないとすると，公的自己意識の高い者がとくに雰囲気操作の作り笑いを多く示すことにはならないといえる．但し，この推論は，ユーモア行為が同じように含まれている行為統制の作り笑い反応と公的自己意識は正の相関があった結果を考えると，説得力に問題があるといえよう．

雰囲気操作の作り笑いが随伴する行為と公的自己意識の関係が，得られた結果に影響しているとする推論は他にも可能である．本研究で構成された雰囲気操作の尺度内容には，作り笑いが随伴する対人行動として自己開示(self-disclosure)が含まれている(項目10，項目19)．私的自己意識は自己開示傾向と正の関係が認められているが(Franzoi & Davis, 1985)，公的自己意識は自己開示との関連が見られない(Reno & Kenny, 1992)．従って，自己開示傾向と無関連の公的自己意識は，自己開

示に随伴する作り笑いとは関連がないことになる．試みに公的自己意識と雰囲気操作尺度を構成する項目間の相関を調べたところ，項目10(r=.022)，項目19(r=.058)とも無相関であったが，自己開示以外の項目9(r=.083)，項目17(r=.120)でもすべて無相関であった．この自己開示説の妥当性ついても今後詳しい検討を待たねばならない．

今後の検討課題

本研究と関連し検討を要する課題は，公的自己意識と雰囲気操作の作り笑いの関係の他にもある．その一つは，各タイプの作り笑いがどのような状況でそれぞれ発生しやすいかの分析である．例えば，関係の親密度の違いにより，それぞれの作り笑いは出現頻度が異なると思われる．第二の課題は，作り笑い反応の個人差源として他のパーソナリティ要因の影響を調べることである．自己モニタリング(self-monitoring)は，感情表出の自己コントロールを一つの基本資質とする性格特性であるので(Snyder, 1974)，当然のことながら，自己モニタリングと感情制御の作り笑い反応との間には強い正の関係が期待される．しかし，自己モニタリングと他のタイプの作り笑い反応との関係は如何であろうか．雰囲気操作や行為統制の作り笑い反応は，むしろマキャヴェリアニズム(machiavellianism: Christie & Geis, 1970)の方が強く関係しているように思われる．マキャヴェリアニズムの高い者は，嘘やお世辞などを使って他者を操作しようとする傾向が強いからである．これらのパーソナリティ変数と作り笑いとの関係を実証的に分析することにより，各タイプの作り笑いの実体がより明らかになると期待できよう．

引用文献

Argyle, M. 1981 The nature of social skill. In M. Argyle (Ed.), *Social skills and health.* London: Methuen.

Argyle, M., & Dean, J. 1965 Eye contact, distance and affiliation. *Sociometry,* **28**, 289-304.

Carver, C.S., & Scheier, M.F. 1981 *Attention and self-regulation: A control-theory approach to human behavior.* New York: Springer Verlag.

Cheek, J.M., & Briggs, S.R. 1982 Self-consciousness and aspects of identity. *Journal of Research in Personality,* **16**, 401-408.

Christie, R., & Geis, F.L. 1970 *Studies in machiavellianism.* New York: Academic Press.

Davis, M.H. 1983 Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology,* **44**, 113-126.

Duval, S., & Wicklund, R.A. 1972 *A theory of objective self awareness.* New York: Academic Press.

Ekman, P., & Friesen, W.V. 1975 *Unmasking the face.* New Jersey: Prentice-Hall. (エクマンP.・フリーセンW.V. 工藤 力(訳編) 1987 表情分析入門 誠信書房)

Ekman, P., & Friesen, W.V. 1982 Felt, false and miserable smiles. *Journal of Nonverbal Behavior,* **6**, 238-252.

Fenigstein, A., Scheier, M.F., & Buss, A.H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **43**, 522-527.

Franzoi, S. L., & Davis, M.H. 1985 Adolescent self-disclosure and loneliness: Private self-consciousness and parental influences. *Journal of Personality and Social Psychology,* **48**, 768-780.

Giles, H., & Oxford, G.S. 1970 Towards a multidimensional theory of laughter causation and its social implications. *Bulletin of the British Psychological Society,* **23**, 97-105.

McGhee, P. E., & Goldstein, J.H. (Eds.) 1983 *Handbook of humor research.* Vol.1 & 2. New York: Springer-Verlag.

宮戸美樹・上野行良 1996 ユーモアの支援的効果の検討—支援的ユーモア志向尺度の構成—

心理学研究，**67**，270-277.
中江須美子・古賀ひろみ・平田万理子・山口一美・坂井剛・押見輝男　1999　パースペクティブ・テイキングと自己—Davisのパースペクティブ・テイキング尺度における検討—　立教大学心理学研究，**42**，57-67.
押見輝男　1973　ユーモアないし笑いの実験的研究について　立教大学心理学科研究年報，**15・16**(合併号)，35-55.
押見輝男　1980　自己焦点注意とユーモア感知　立教大学心理学科研究年報，**21・22**(合併号)，50-56.
押見輝男　1990　「自己の姿への注目」の段階　中村陽吉（編）「自己過程」の社会心理学　東京大学出版会
押見輝男　1992　自分を見つめる自分—自己フォーカスの社会心理学—　サイエンス社
押見輝男・渡辺浪二・石川直弘　1986　自己意識尺度の検討　立教大学心理学科研究年報，**28**，1-15.
Reno, R. R., & Kenny, D. A. 1992 Effects of self-consciousness and social anxiety on self-disclosure among unacquainted individuals: An application of the social relations model. *Journal of Personality*, **60**, 79-94.
Snyder, M. 1974 Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 526-537.
上野行良　1992　ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について　社会心理学研究，**7**，112-120.
上野行良　1993　ユーモアに対する態度と攻撃性及び愛他性との関係　心理学研究，**64**，247-254.